屍鬼

小野不由美著（新潮社 1998.9）

私がこの夏是非みなさんに読んでみて欲しい本、小野不由美さんの「屍鬼」を紹介する。

「屍鬼」はハードカバー版（上・下）と、文庫本5巻とがあり、一見するだけで厚みと重みが感じ取れる大作である。夏に是非読んで欲しいと言ったものの、暑苦しい真夏にはこれほどの量の本を手にすることさえもうんざりするという人は多いであろうが、そこをあえて我慢してもらいページを開いてほしいと思う。なぜこんなにも夏にこの本を薦めるのかというと、この作品がホラーであり、物語の舞台となる季節が夏だからである。読書をするにあたって、作品自体の季節柄など自分が読書する際には関係ないとも思うが、せっかく手にした本に対して、物語の背景を少しでも感じ、臨場感あふれる読書環境にするというのも作品にのめり込むための一つの要素となるのではないだろうか。そのため今回紹介する作品は、猛暑に襲われたとある日本の小さな村で起きた奇怪な事件の物語である。

人口わずか千三百人の山に囲まれた小さな村は、外社会とは特に行き来もなくほぼ閉鎖状態の中、ある特別な宗教的祭りごとを大切にして村人だけの社会を築き守っていた。そんな村にある日新しい住民が越してきた。それとほぼ同時に村の山奥の集落で三体の腐乱死体が発見された。これがすべての始まりであり、後に村の崩壊の根となっていくのだ。そしてそれを機に、例年にないほどの相次ぐ住民たちの死。死の正体は殺人か疫病か、村人たちの不安と恐怖は刻々と募っていく。そんな中、村のほとんどを檀家に持つ寺の若住職と、彼の幼馴染であり村で唯一の医者である男が、この謎の解明に乗り出す。この主人公の二人を中心として明らかになっていく謎と、その他の村人のそれぞれの性格を中心として日々募る恐怖と疑惑を、様々な人の生活を通して描き出されていることにも注目できる作品である。どんなに狭くともそこに居住する人間とそこから生まれる社会は、存在するものの種類の豊富さに、まるで自分の近所でもありそうなことのようで、読む者に親密さを与える。しかし根本はホラーであり、実際にはあり得ることなどないフィクションなので、物語そのものに親近感を覚えることはない。だが一度読み始めると最後、いくら最初読むことに多少の躊躇を感じたとしても、今度は休憩をいれることさえ躊躇するほどに次の展開が気になり、徐々にしかし確実に小野ワールドへのめり込んでいき一気に読み通してしまいたくなるだろう。この作品にはそんなパワーが詰め込まれているのだ。

「屍鬼」を読み終えたとき、感じるのは面白かったとかすごかったという単純な感想だけでは済まされず、ましてややっと読み終えたという達成感を感じることなどない。そこには一種の畏怖感を覚えることだろう。物語そのものの展開や結末がどうなるかは是非自ら表紙を開いて読み知っていただきたい。

（外国語学部英語学科4年 尾西望美）

宇宙樹

竹村真一著（慶応義塾大学出版会 2004.6）

人類と自然の共生は長く問われつづけてきた問題であるが、多くの人はどこか他人事で、自分自身も自然の一部だと改めて意識することは少ないだろう。確かに環境問題というカテゴリーで考えると仰々しさは否めない。しかし私達が培ってきた生活の知恵と技術が、自然によって導かれてきたものだとしたら？本書では、人と自然の関係性を、私達の身近にある生活技術を例にとりながら"宇宙"という壮大なフィールドの中に位置付けている。

『天地・宇宙全体が樹木のからだ――。植物は、その身を宇宙の循環経路として貸し与えている。』

つまり季節がめぐって花が咲くのも、紅葉になるのも、果実が実るのも、すべて宇宙が樹木という媒体を通して自己を表現しているのだ、と。食材や木材、薬草、染料といった植物からの恩恵は全て人間と植物の共進化の手段であり、私たちは知らず知らずのうちに宇宙とコミュニケートしているらしい。さらに特定の植物とパートナーシップを築くことが可能だと著者は続ける。

例えば、あなたが森の中でお気に入りの木を一本見つけたとする。その木をまるで我が子のように抱きしめ「わたしの木」と意識してみてほしい。それはもちろん所有の意味ではなくパートナーとしての意味で。その後、たとえ離れ離れになったとしても「わたしの木」が伐採されることになったりしたら誰よりも心配するだろうし、森林保護も自分の問題として意識するようになる。そうした関係の密度こそが、今後の共生への鍵となるのではないだろうか。この広大な地球のどこかにある「わたしの木」を私も見つけてみたい、そんな気分にさせられた。

（宮崎里佳）